

その他

徳島大学まなび連の活動概要と展望

新開 英毅*・篠原 一二三*・澤 美恵子*・赤枝 尚美*・吉岡 滋*・京野 義明*

Sphere of Activities and Prospects for Alumni Association of Two-Year Leadership Course,
Center for Community Engagement and Lifelong Learning, Tokushima University

Hideki SHINKAI, Hifumi SHINOHARA, Mieko SAWA, Naomi AKAEDA,
Shigeru YOSHIOKA & Yoshiaki KYONO

1. はじめに—徳島大学まなび連の発足経緯と概況—

徳島大学まなび連(以下、まなび連)の歴史は、徳島大学人と地域共創センターの前身となった一部局である(旧)大学開放実践センター(2019年3月廃止)において、2013(平成25)年4月に発足した二年制の公開講座「生涯学習研究院」の開設に遡る。同講座の受講生は、4領域(青少年健全育成、健康フィットネス、災害対策とICT、国際協力/多文化共生)に分かれ、2年間の学修期間に、公開講座や公開授業の中から基礎科目・専門科目を体系的に学ぶとともに、調査研究・レポート作成のそれぞれに取り組み、120時間以上を費やす。修了時に受講者には「市民活動支援士」の称号が授与され、それぞれの関心のある分野において、大学で学んだ成果を活用し、徳島県における地域課題の解決につながる活動を行うことが期待されている。

以上の経緯により、まなび連は、第一期の生涯学習研究院修了生が輩出された2015(平成27)年3月に修了生により結成された。会の名称であるまなび連は、会員がともに学び続けようとの思いと、阿波踊りで一つの踊りのグループを表す「連」をとり、(旧)大学開放実践センターより名付けられた。

同センターでは、2018(平成30)年まで「生涯学習研究院」制度の募集が継続されたが、その後受講者の減少に伴い、2019(平成31)年3月をもって募集停止となった。変わって2019(平成31)年4月に創設された徳島大学人と地域共創センターにおいて、同制度の後身となりうる「とくしま健康寿命からだカレッジ」と呼ばれる新制度が始まった。同カレッジは、健康寿命の延伸とそれに係る地域ボランティア並びに地域リーダーの育成を目的として、2019(令和元)年10月から翌年3月まで6か月間を履修期間とする基礎課程が開講された。修了者には、「健康寿命パートナー」

* 徳島大学まなび連

の称号が授与され、そのうち希望者は2020（令和2）年4月にまなび連に入会することとなった。したがって、2021（令和3）年現在、まなび連には、「生涯学習研究院」制度の修了者と「とくしま健康寿命からだカレッジ」制度の修了者が加入している。

まなび連の会員は現在20名である。主な活動として、竹細工による青少年の健全育成、徳島大学内外における公開講座、読書文化型コミュニティづくり、楽しい居場所づくり等がある。この他、ニュースレターは発足時より年1回発行している。ニュースレターには、会員の活動や作品、年間事業・予算、会員名簿、会則等を掲載しており、会員相互の触れ合いの場となっている。

以下では、まなび連の代表的な活動事例を述べた後、今後の課題と展望を整理する。

2. 代表的な活動事例

1) 竹細工による青少年の健全育成活動

この活動で講師として活躍する会員の一部は、生涯学習研究院で学んでいた2014（平成26）年10月に、国立淡路青少年交流の家において、「竹細工及び木の実等の作品作り」の講座に参加した経験がある。その際、当該会員らは竹細工の作り方や指導について学び、同年11月に同所で開催された淡路渦潮フェスティバルにおいて、参加した子どもたちを含む家族連れに、竹トンボや竹鉄砲の作り方を指導した。

こうした経験をもとに、2016（平成28）年に徳島県立総合教育センターで開催された「学び丘フェスティバル」に、当該会員らはまなび連として初めて参加することになった。このフェスティバルは毎年11月3日に行われ、各種の講演会・発表会・展示があり、多くの県民の学びの場・触れ合いの場となっている。この活動においてまなび連は、市民活動支援士として、青少年の健全育成を図るため、子どもを対象に竹馬・竹トンボ・竹ぼっくり・竹鉄砲・ヤジロペー・どんぐり細工等の竹細工の作り方や遊び方を教え、竹細工を通して家族の触れ合いや伝統文化を伝える活動を推進している（写真1）。この活動は、以後まなび連の代表的活動として継続して実施されている。



写真1 「学び丘フェスティバル」の様子

また、2017（平成29）年7月には、徳島県立総合教育センター主催の講座「孫育て楽しみ隊」において、祖父母世代約30名を対象に「あそび（竹細工）と防災でつながろう」をテーマとして講習会を実施した。この他、2019（平成30）年より、地域に出かけ、子ども会の「きらきら夏まつり」において、母子に笹船の作り方やゲーム等の指導をしている。

2020年以降本校執筆時の2021（令和3）年まで、新型コロナウイルス感染症の影響により各種催しが中止になっているが、担当講師らは、活動再開に備え、指導方法の研究や新しい竹細工の方

法について研鑽に努めている。

2) 徳島大学内外における公開講座

徳島大学人と地域共創センターでは、一般市民を対象に、年に2回、春夏期と秋冬期の公開講座が開講されており、まなび連の会員の一部は、講師として活躍している。代表的な公開講座は以下に述べる「シニア世代いきいきライフ講座～孫育て支援～」, 「楽しく話してフレイル予防」そして健康運動にまつわる講座である。この他、学外においても、会員の中には独自で専門性を活かした活動を行い、地域に貢献している者もいる。以下に代表的な講座について述べる。

① 「シニア世代のいきいきライフ講座～孫育てを考えてみませんか～」

まなび連として初めての公開講座となる本講座は、2018（平成30）年12月に、徳島大学の旧大学開放実践センターにおいて実施された。講座では、受講者には次の3つについて体験してもらった。

a. 自宅で孫と一緒に腰痛体操

ストレッチ、コンディショニングやストレッチボールを使う運動を行い、身体を動かし、整えることの良さを体験する（写真2）。

b. 孫と一緒に防災について考えよう

いつ災害が起きてもおかしくない時代に、危機管理とは何かを考える。ロープワークや、防災に役立つビニール袋でのカップづくり、ズボンでのリュックサックづくりに挑戦する。

c. 孫とヤジロペーづくりと絵本で遊ぼう

団栗と竹ひごを使いヤジロペーを作る。続くワークショップでは、伝統遊びや絵本の読み聞かせについて話し合う。

講座修了後、受講者からは「いろんな体験ができた。早速孫と一緒に（講座で制作したものを）作ってみたい」と喜びの声が聞かれた。



写真2 公開講座の様子

② 「楽しく話してフレイル予防」

この講座の第1回目は、2019（令和元）年度の徳島大学人と地域共創センターの春夏講座において、5月から7月にかけて（計10回）会員2名により実施された。初回の受講者は16名で、年齢層も多岐にわたり、中には聴覚障がいの方も含まれた。

本講座は、自分の意見を述べるとともに、他者の意見も聞き、互いに話し合いをすることによって楽しく交流することを目的としている。講座内容には、「認知症について」・「児童文学から見え

るもの」・「高齢者の地域参加・活動」・「外国人受け入れ拡大」等が含まれ、資料はテーマごとに毎回配布された。講座の形態はグループ活動を基本とし、毎回同じメンバーにならないよう受講者が自分で座席を決めることにした。各グループでは、お互いに役割を決めて話し合いを行った後、それらの結果をグループ発表のスタイルで他のグループと共有した(写真3)。



写真3 公開講座の様子

講座では、開始後3回目の講座から「必ず意見を述べる。マイクを持って話す。」というルールを取り入れたところ、「自分の意見を言うことができるようになり、良くなった。」という声も聞かれるようになった。講座の回数が進む毎に、受講者は自分のことや身の回りのことを話すことができるようになり、会話の声も大きくなり笑顔も増えてきた。最終回の講座では「良かった」「面白かった」「また開講してほしい」という喜ばしい意見も、みられた。

講座は本執筆時点の2021(令和3)年度も継続して実施しているが、回数を重ねるうちにリピーターが増えてきている。それに伴い、講座で共有する話題の提供や進行に際して、座を盛り上げるためのファシリテーション能力やコミュニケーション能力等、担当者の高い力量が求められるようになってきた。また、本講座を継続させるためには、何よりも受講者の思考力を刺激し、興味を湧かせるような話題の事前探索が常に必要となる。その意味で、本講座は担当者自身の「フレイル予防」にもつながっているといえるだろう。

③ 健康運動に関する講座

健康運動に関する講座は、健康フィットネス領域の修了生を中心に、学内外で実施されている。学内で実施されたものとしては、2015(平成27)年の秋冬期と2016(平成28)年の春夏期に実施した「身体を動かしてみよう(運動デビューおたすけ講座)」がある。続く2017(平成29)年春夏期には、講座名を「楽しく学ぼう健康運動」と改め、1回の所要時間を60分から90分に拡大した所、希望者が倍増し、2つのグループに受講者を分けて実施することとなった。これらの講座は、普段運動する習慣のない人、運動嫌いな人向けに、「健康寿命延伸のための知識を習得し、日常生活の中に取り入れて実践しフレイルを予防する」ことを目標としており、内容としては、プリント等資料を用いての座学、簡単なストレッチや筋力トレーニング、認知症予防の脳トレ、体力テスト等が含まれた。

また、講師の中には、2017年9月に開催された「徳島大学大学開放実践センター創設30周年記念フォーラム」において、パネリストとして活動の一端を紹介したり、学びの森(放送大学徳島学習センター・徳島県立図書館共催イベント)、シルバー大学OB会研修、徳島市フェスティバル等

で講演をしたりする者もいた。

2019（令和元）年度より徳島大学人と地域共創センターで開設された「とくしま健康寿命からだカレッジ」においても、健康フィットネス領域の修了生は、楽得エクササイズ「筋トレ&ストレッチ」及び「脳トレ・コグニサイズ」において講師補助を務めている。

このように、健康フィットネス領域の修了者は、学内外で活動が続けているが、学外で活動を行う場合、講師自身が会場探しから必要物資の準備、事務手続き等すべて手配しなければならない。最も苦慮するのは場所の確保であり、会場代等が発生すると受講料として参加者の負担をお願いせざるを得なくなることもあるが、これらを円滑に進めることも今後の課題となろう。

さらに、2020（令和2）年度より本稿執筆時の2021（令和3）年度までコロナ禍に見舞われており、活動や行動が制限され、多くの困難を強いられている。このため、以上の活動においては、参加者の健康チェック、手指および物品等の消毒、発声や互いに触れるようなメニュー内容の見直し等の基本的な対策を行った上で、それを補う工夫の一つとしてSNSを活用し、健康情報や日々の運動のアドバイス等を受講生に伝える等の新たな工夫を凝らしている。また、コロナ禍では中高年層におけるフレイルの進行の深刻化も懸念されるため、一層の工夫及び積極的な働きかけが求められている。

3) 読書文化型コミュニティづくり

この活動では、「人を通して本を知る。本を通して人を知る。」をモットーに、異なる世代の多様な人々が読書を通じた交流で読書習慣を取り戻すことにより、地域の読書文化を育て、精神的・文化的に豊かな社会を形成することを目指している。担当者は徳島大学内外で多岐にわたる活動に取り組んでいるが、以下は読書推進に向けた図書館と博物館における活動事例である。

① 図書館における活動

徳島県立図書館では、「お話し会ボランティアスタッフ」として、親子を対象に、手遊び、大型絵本、紙芝居、エプロンシアターやパネルシアターづくりの実演等を子どもの本コーナー付近で実施する他、和歌・詩歌・俳句等の選書を行っている。同図書館内では、第4日曜日に4名で30分のプログラムを実施しており、これとは別に、子どもの日、夏休み、大秋祭り等に開催される「文化の森フェスティバル」では50分のプログラムを実施している。このボランティアとして活躍するために、担当者は各種の研修会を受講している他、年2回、図書館職員とのミーティングによる情報交換を行っている。この他、担当者は個人的に小学校や書店、地域の広場に向向いて読み聞かせも行っている。今後担当者は、公共図書館だけでなく、学校図書館でもサポーターとして活動することも検討しているところである。

② 博物館における活動

徳島県立博物館では、ボランティアスタッフとして、より多くの人々が博物館を楽しめるように仲間同士でアイデアを出し合い、多様な世代向けのイベントの企画・準備、行事の補助等を行っている。例えば、過去のイベントでは、影絵班として、まなび連で制作した竹とんぼ、紙鉄砲、コマ等を影絵で示して参加者にあてさせるクイズを行った他、徳島の昔話『入田の化け物道』をもとに阿波弁で脚本をつくり、人物や配役等にも配慮しながら影絵を使った講演を実施した。この他、紙芝居『モンゴルの白い馬』をもとに、実際にボランティアがモンゴルの衣装を着用したり、モンゴルで撮影した写真等を披露したりしながら読み聞かせの実演を行った。

担当者は、以上に述べた図書をめぐる活動を地域の社会教育の拠点となる場所で実施することと併行し、徳島大学において関連する公開講座を継続的に受講し、多様で高度な学びを続けている。それにより、本を通じた高齢者の文化サロンのサードプレイス（自宅でも職場でもない、第3の心地の良い居場所）が地域の中に形成される一助となることを目指している。

4) 楽しい居場所づくり

近年、全国各地で団塊世代の高齢者を中心に居場所の必要性が高まっている。すなわちそれは、「町内会」のようなものであり、人と人との出会いの場である。まなび連としての、楽しい場所づくりにするための活動では、皆が主役となりうるご近所の居場所を指しているが、その形成過程は次のようなものである。

a. まずはご近所の居場所づくりから

この活動の講師が所属する居場所では、入室と同時に検温、血圧測定、集金、椅子の準備と片づけ等を、できる人が行っている。主な活動内容は、100歳体操、口腔体操、介護プログラムであり、全部で約3時間の内容となっている。協力して作るゲームは、交流の場になり、自分の役割や絆が生まれるものでもある。自分に役割があるのは「居心地が良い」ことになる。「居心地が良い」場所では、相手を思いやる気遣いができるため、そこは自然と自分らしくいられる場所となる。このような居場所を継続して形成していくには、長い年月をかけ、人と人との間の親しい交流を休まず励み続けることが必要となる。

b. 助け合い活動へ

次の段階では、例えば介護予防プログラムで、折り紙をしたり、ゲームをしたり、茶話会で会話や対話を楽しむことによって、フレイル予防はもとより、人と人とのがより気軽に話ができるようになり、互いの絆が生み出されるようになる。この絆ができると、「ちょっとお願いしたいなあ」とか、「お手伝いしてあげようか」というような、互いに助け合える関係が形成されてくる。つまりこの段階では、人と人との助け合い、助けられたり共助活動へと発展していくことが期待されているのである。

c. 発展的居場所活動へ

さらにその次の段階においては、活動への賛同者が増加していくが、そうなると元々の居場所が様々な個性的な居場所へと発展し、多種多様なより楽しい居場所の創出が求められるようになってくる。例えば、同じ居場所といっても、交流型、趣味型、食事型、茶話会型といった、それぞれの個性にあった居場所が創出されてくるのである。

以上の活動のプロセスを通じ、居場所づくりにおいては、「(活動は)腹八分目で頑張り過ぎず皆が行う。失敗は成功のもとで、最初から完璧を求めない。協力、共助は出来る時に出来る人が行う。最終的には互いに異なる発展的な居場所を尊重しあう。」ことが重要であることが判明した。いずれにせよ、このような活動の発展には、息の長い人と人との交流が不可欠である。

3. おわりに—今後の課題と展望—

まなび連が発足して、2021(令和3)年度で7年目となる。発足当時は、ボランティア活動の経験者も少なく、今後どのようにしてまなび連としての活動に取り組むべきかについて、会員間で意見交換を行った。何度か話し合いを進めていくうちに、主に二つの活動を始めることとなり、その活動は現在も継続している。

一つは、地域社会における子ども支援である。地域における子どもの支援は、家庭教育に良い効果が生まれ、地域に愛着の持てる子どもを育てることにつながる。この活動は、徳島県立総合教育センターで行われた、学び丘フェスティバルのイベントの参画として結実し、今日まで継続している。もう一つは、徳島県の地域課題の一つでもある高齢化への対応である。特に、徳島県は高齢化先進県である。高齢者同士が話し合ったり、健康運動を行ったりすることはフレイル予防につながる。この活動は、大学内外での公開講座として結実し、会員の一部は講師として活躍する等、およその方向性が定まりつつある。

以上の取り組みは、次第にその他の会員にも浸透し始めているが、本稿執筆時点では十分とはいえない。その主な原因として、会員それぞれの事情やボランティア活動に対する意向が異なり、必ずしも意思疎通が全体で効果的に行われていないことがある。結果として、現在の活動は一部の会員に限定されがちであり、全体会を開催しても、参加者は少ないままである。また、2020(令和2)年以降、新型コロナウイルス感染症の影響により、従来の対面での会合を中心とした集合形態では中止や延期を余儀なくされることが多く、会員間の意思疎通や、主たる活動及び行動に制限が生じている。同年以降、徳島大学人と地域共創センターの下で発足した「とくしま健康寿命からだカレッジ」修了者の入会で会員も増えたものの、新入会員との相互交流も十分にできない状況が続いていることは、活動の継続にとっても好ましい状況ではない。

そこで今後の課題として、何より重視しなければならないことは、会員の間での意思疎通をより密にし、発展的な活動へとつなげていくことではないかと考えている。そのための具体策として、会員間で、研修会を定期的に開催し、会員の知識・技能の刷新・向上を目指すとともに、そこでの

交流を通じて新旧の会員が協力・協調し、まなび連の活動について理解を深めることが挙げられる。また、元々の4領域に加え、「とくしま健康寿命からだカレッジ」の修了者も含め、それぞれの専門領域を学びあうとともに、それらを横断する共通の課題の探究も求められるだろう。さらに、徳島県においては、過疎化、人口減少、急速に進行する高齢化、南海トラフ地震への対応、地上デジタル放送への移行、といった課題がある。まなび連の活動が、これらの課題解決に向けて貢献できるよう、徳島大学でのさまざまな学びを活かしつつ、既存の活動内容を精査し、その質を一層高めていくことも考えられる。また、相互交流の手段としては、2020（令和2）年1月以降、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での集会や活動に制約がある中、オンラインでの交流を活発化させ、互いの意思疎通を寸断せず、継続させていく努力も求められてこよう。

まなび連の活動は、徳島大学の地域に開かれた部局である旧大学開放実践センターや2019（令和元）年4月に発足した人と地域共創センターによる支援・協力により支えられながら徐々に発展してきた。地域の知の拠点である徳島大学との協力関係を今後も大いに活かしながら、まなび連独自の地域社会に貢献できるものは何かを引き続き追求していきたい。

謝 辞

徳島大学（旧）大学開放実践センター生涯学習研究院においてご指導いただきました馬場祐次朗先生、田中俊夫先生、金西計英先生、鈴木尚子先生に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

注 記

本稿は、以下の分担により執筆した。

執筆箇所：1. 新開，2. 1) 篠原，2) ①新開，②澤，③赤枝，3) 吉岡，4) 京野，3. 新開